

なぜ未婚男性は「婚活」をしないのかーリスク回避か先送りかー

Why Don't Unmarried Male Search for A Marriage Partner? : Risk
Aversion and Procrastination Behavior

西村教子

公立鳥取環境大学経営学部
関西大学ソシオネットワーク戦略研究機構

概要

今日、「婚活」は多様化してきている。しかし、実際には交際相手や結婚相手を見つけることは難しく、未婚率の上昇は止まる気配がない。本稿は結婚意欲があるにもかかわらず、婚活をしない理由を、危険回避の態度や時間選好といった個人の特性から明らかにしていくことを目的としている。2021年に30歳代男性を対象に実施したインターネット調査から作成した結婚意欲度、危険回避度と時間選好の4類型を用い、ロジット分析で結婚活動に与える影響を検証した。その結果、危険回避的な人や無計画に先送り行動をしがちな人は結婚活動を行わない傾向にあることが明らかになった。危険回避的な人は早く結婚を決断するという多くの研究結果とは逆に、結婚活動の選択場面では、独身が持つリスクより結婚活動が持つリスクを回避しようとしていることを示した。また、先送り行動をする人は双曲型の割引関数を持つと考えられ、その特性から結婚したほうが期待生涯効用は高くなることを認識しているにもかかわらず、結婚活動の場面では、その価値を大きく割り引いて、先送りをしている。つまり、どちらの特性も、結婚の価値を評価しているにもかかわらず、結婚活動は行わないという矛盾した選択をしていることが明らかになった。そして、その原因はリスクの過大評価や結婚のメリットの過小評価にあると言える。

Keyword: 結婚活動、危険回避度、先送り行動、インターネット調査

1 課題と目的

結婚活動は「婚活」という言葉で、「就活」と同じように当たり前のように使われ、個人の活動だけを指すのではなく、婚活を謳ったビジネスやイベントなど官民関わらず広く用いられている。このトレンドは、結婚するためには積極的に自ら動かなければならないことを意味する。国立社会保障・人口問題研究所(2022)は、2018年7月－2021年6月の間に結婚した夫婦が知り合ったきっかけの13.6%が「(SNS、アプリ等を用いた)ネットで」であることを発表した。同時に、見合いや結婚相談所を通じた「見合い」も増加し、これまで主流であった「友人・兄弟姉妹を通じて」や「職場や仕事で」の割合は減少している。このように、コロナ禍の影響¹は不明であるが、結婚相手との出会いは多様化してきている。

一方で、男女の未婚率は上昇し続け、2020年の30歳前半の男性未婚率は51.8%で、50歳時未婚率は28.3%と結婚に結びついていないのが現状だ(総務省,2020)。今日の日本の社会・経済環境を背景に、「結婚できない」または「結婚したくない」若者が増えていると考えられている。しかし、国立社会保障・人口問題研究所(2022)の2021年調査によると、30歳前半未婚男性の70.8%は「いずれ結婚するつもり」と考えており、2015年調査から12.5ポイント低下しているものの、結婚の意思を持つ未婚男性は多い。しかし、恋人または婚約者がいる人はわずか14.2%と相手が見つからない様子がうかがえる。このように、結婚意欲と実際の交際や結婚とは大きく乖離している。

山田(2010)が指摘するように、選択肢が増え、そして自分で選べる現代社会において、自分が選択できることは同時に相手から選択されない可能性が増えることを意味する。つまり、積極的に活動すればするほど相手から選ばれない機会が増え、また活動コストがかさんでいく。活動しなければ結婚相手とは巡り合えないが、その活動が苦痛をもたらす可能性が高ければ、たとえ結婚意欲が高くても、結婚活動になかなか踏み出せない人も出てくるだろう。また、結婚活動とは現在の時間や金銭といったコストをかけることで、将来結婚できる可能性を掴む行為であり、現在の生活の一部を犠牲することを好まず、結婚活動の先送りをしている人もいるだろう。

例えば、村上(2010)は「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」を用いて、2008年調査時点で「ぜひ結婚したい」と回答した男性で2008-09年の結婚活動をした割合は50.2%と、意欲に対して活動が伴っていないことを報告している。また、結婚活動の種類が多いほど交際相手を得ている割合が高いことを指摘している。しかし、3つ以上の活動数の男性でもその割合は17.9%と極めて低く、積極的に活動してもよい交際相手が見つからないことを示している²。本研究は、このような未婚男性が結婚活動を行わない選択に関して、結婚活動をしない行動をリスク回避や先送りといった行動を個人が持つ特性から説明しよ

¹ 婚姻数は年々減少傾向にあるものの、2019年59.9万件から2020年には52.6万件、2021年には50.1万件と新型コロナウイルス感染症の蔓延した年に大きく減少した。(厚生労働省,2023)

² 活動数3つ以上の女性が交際相手を得た割合は男性の2倍の35.0%であった。

うとするものである。

2 結婚活動の規定要因

(ア) 結婚意欲

結婚活動とは結婚を目標に主体的に行う積極的な活動であり、結婚に価値を見出し、結婚意欲を持っていなければ、結婚活動には至らない。永久他(2015b)は安心感や情緒的サポートといったプラスの結婚価値は結婚意欲を高め、独身時のライフスタイルや時間、金銭的自由を失うといったマイナスの結婚価値は結婚意欲を低下させることを示した。このプラスの結婚価値の低さが結婚意欲の低下、結婚活動の動機づけの低下をもたらし、晩婚化・未婚化の原因となっていると指摘している。結婚意欲に関する研究は、前述の永久他(2015b)をはじめ、岩間(1999)、釜野(2004)、福田(2005)、小林(2006)、中谷(2018)などがあり、これらの成果から未婚男性の結婚意欲に共通する規定要因は次のようにまとめられる。まず、男性は年齢の上昇に伴い結婚意欲が高まることが報告されている。そして、女性と異なり年収や就業状態が結婚意欲に強く影響を与えている。伝統的性別役割分業の意識によって、稼ぎ手である男性は安定した経済基盤が確立されることで結婚意欲が高まると指摘されている。特に、福田(2005)は、経済変数で統制しても伝統的性別役割分業意識は結婚意欲と正の相関があることを報告している。他に、現在の恋人の存在や友人など周囲の結婚は結婚のイメージが具体化させ、結婚意欲を高めるとことが報告されている。

(イ) 危険回避と先送り行動

結婚活動はジョブサーチモデルを援用したメイトサーチモデルで説明される(Ermisch,2003; 橘木・木村,2008)。個人は自身の生涯効用が最大になるように行動すると仮定すると、結婚のオファーを受けた時点で、独身でいるときの割引期待効用と結婚した場合の割引期待高効用を比較し、独身でいるほうが大きければオファーを拒否し、結婚した場合のほうが大きければそのオファーを受諾して結婚する。その時、オファーを受け入れる最低ラインの留保水準は独身である場合の割引期待効用に相当し、サーチコストを考慮したとき、次のように定義される³。

$$R_j = b_j - c_j + \frac{\alpha_j}{r + \delta} \int_{R_j}^{\infty} (x - R_j) dF_j(x)$$

³ 結婚をした場合に受ける便益を x 、独身の場合を b_j とし、また割引期待効用は結婚した場合を $rV_{jM}(x)$ 、独身の場合を rV_j と置くと、それぞれ

$$\begin{aligned} rV_{jM}(x) &= x + \delta[V_j - V_{jM}(x)] \\ rV_j &= b_j + \alpha_j \int_{R_j}^{\infty} [V_{jM}(x) - V_j] dF(x) \end{aligned}$$

である。これらはそれぞれ結婚の価値、独身の価値と考えることができる。留保水準 R_j はこれらの式にサーチコスト c_j を加えたものからなる。

個人 j の留保水準を R_j は独身でいるときに便益 b_j を得るが、結婚活動のサーチコストを c_j と置くと、独身でいるときの純便益は $(b_j - c_j)$ である。結婚後に確率変数 x の便益を得る結婚のオファーを α_j の確率で受けることがわかっているが、 δ の確率で離婚する可能性もある。この時、時間割引率を γ とすると、右辺第 3 項は割引期待キャピタルゲインを示している。定義式より、独身でいるときの便益 b_j が大きいほど、またはオファーを受ける確率 α_j が大きいほど、留保水準 R_j が大きくなり、結婚まで時間をかける。一方、サーチコストや離婚確率、時間割引率は大きいほど留保水準が低くなり、結婚を早期に決断するか、サーチコストが割引期待キャピタルゲインを上回れば、結婚活動や結婚をしないという逆の選択をすることが考えられる。

リスクに対する態度は、結婚が持つ保険機能や離婚確率、サーチコストを通じて結婚に影響を与えると考えられる。危険回避的な人ほど結婚の保険機能を重視して結婚する傾向にある。一方、結婚後の離婚などの不確実性を回避しようと慎重になり、結婚活動期間が長くなるとも考えられる。そして、Spivey(2010)は危険回避度が高いほど、追加的な結婚活動の機会費用が増加していくため結婚タイミングは早くなることを指摘している。佐藤(2016)も『慶応義塾家計パネル調査』を用いて、危険回避的であるほど、結婚タイミングを早めるとともに、結婚確率も高くなることを明らかにした。西村(2020)も危険回避的であるほど男性の結婚確率が高まることを報告している。

一方、これらの研究成果と反する結果を報告するもある。例えば、Picone et al.(2004)や佐々木・平井・大竹(2016)は、危険回避的な人ほど乳がん検診を受診していないことを報告している。がんの発見が遅れる健康リスクを回避するために、危険回避的な人ほど検診を受診すると考えられる。しかし、受診によってがんが発見され治療が失敗するなどの別のリスクに直面する。このようにどちらの選択肢にもリスクが伴うとき、危険回避的な人ほど検診の受診といった積極的な行動をとるとは限らないのである。結婚活動も同様に、活動しなければ結婚相手が見つからないが、活動したからといって必ずふさわしい結婚相手が見つかるわけではなく、活動しなければ経験しなくてもよい、相手から選択されないなどの苦痛に直面する可能性がある⁴。そして、うまく結婚できたとしても離婚などさまざまな不確実性が残されており、独身のままでいる将来のリスクよりも現在の結婚活動が持つリスクを回避する行動をとる可能性がある。

時間に対する選好は上式の時間割引率 r に係る。時間割引率は一般的に指数型の割引関数を用いるので時間に対して一定であるので、現在でも将来でも選択は同じになる。このとき、時間割引率が小さいほど、将来を重視するためより良い結婚機会を待とうと結婚活動期間は長くなる。一方、時間割引率が大きいと、将来の利益を大きく割引くので結婚を安易に決断するかもしれないし、サーチコストのほうが大きくなれば、結婚活動や結婚を

⁴ 上式から、結婚する確率は結婚をオファーされる確率 x そのオファーの受諾確率で決まる。

先送りする可能性がある。しかし、割引関数が双曲型の場合、時間に対して割引率は低下していくため異時点間で非整合な選択をすることになる。つまり、結婚を遠い将来として考えたとき独身のままであるより魅力的に感じるので、留保水準は高い水準で留まるが、近い将来で考えたとき留保水準は大きく割り引かれ、コストのかかる結婚活動を先延ばす選択をしてしまうのである。西村(2020)は、年収 400-599 万円の男性は時間割引率が高いほど結婚確率を低下するが、逆に 400 万円未満や非正規雇用の場合、結婚確率が上昇することを報告している。この結果は、年収が高い独身時の便益が高く、結婚活動にかかる機会費用も高いためであると説明している。

しかし、双曲型の割引関数を持つ現在重視な人が必ずしも先延ばし行動をするわけではない。このような時間に対して非整合的な行動特性を自覚し、実行可能な計画を立てるなどして先送り行動に制約を課すことで、先延ばし行動を回避することができる。西村(2016)の大学生を対象にした恋人探しの実験で、双曲型の方が恋愛の先送り傾向があること、そしてそれを再認識させる仕掛けが彼らの先送り防止に有効であることを明らかにした。このような時間に対し非整合な行動特性を自覚せず先送りをする人をナイーブな人と呼び、行動を自制できる人をソフィスティケートな人と呼ぶ。

以上のことから、結婚したほうが良いと思っている、つまり結婚意欲があるにもかかわらず結婚活動をしない選択は、危険回避的な人やナイーブな人が陥りやすいことが予想される。そこで、30 歳代の未婚男性を対象にした web アンケート調査を用いて、結婚活動とリスクや時間に対する選好との関係を検証していく。

3 調査の概要

本研究は、30 歳代の独身男性を対象に 2022 年 3 月に実施した web 調査「結婚に関する意識調査」⁵をもとに分析を進めていく。調査は 22 問からなり、結婚意欲(4 件法)、現在の異性との交際状況、独身理由 13 項目(順位 2 位まで)、結婚メリット 10 項目(4 件法)、独身メリット 10 項目(4 件法)、幸福度(10 点満点)、仕事や生活の将来への希望(5 件法)、夏休み課題実行(5 パターン)、夏休み課題計画(6 パターン)、スピードくじ購入金額 9 項目(2 件法)、前年の税込総所得(10 階級)、最終学歴、同居人などの質問をしている。有効回答数は 492 名であった⁶。

回答者の基本属性は表 3-1 の通りである。回答者の平均年齢は 35.0 歳で、大学以上卒業者が半数を占める。総年収は、200-400 万円の人が 36.0%と最も多く、6 割以上の人が 400 万円未満であった。30 歳代男性の平均給与は 30-34 歳で 472 万円、35-39 歳で 533 万円であることから、結婚を意識した時に回答者の経済的条件が良いとはいえない(国税庁、

⁵ アイブリッジ株式会社に調査委託をした。また、調査内容が異性との交際に関する状況や考え、経済状況などの内容が含まれるため、調査前に回答の意志を確認している。

⁶ 回答者数は 550 名のうち同居者に妻や子などがいる回答者 48 名、婚約している回答者 10 名を除外した。

2022)。また、半数以上が親と同居し、8割は現在交際相手がいない状態である。

表 3-1 回答者の基本属性

	基本属性	回答者(n=492)	
		人	%
年齢	30-34 歳	212	43.1
	35-39 歳	280	56.9
平均年齢		34.96 歳	
総所得	200 万円未満	126	25.6
	200-400 万円	177	36.0
	400-600 万円	132	26.8
	600 万円以上	57	11.6
学歴	中・高校	166	33.7
	専門・短大・高専	75	15.2
	大学・大学院	251	51.0
居住	一人暮らし	221	44.9
	親同居	271	55.1
交際相手	いる	99	20.1
	いない	393	79.9

次に結婚意欲と結婚行動を見ていく。表 3-2 のように結婚意欲は自身の結婚についての考えを問う質問で、「できるだけ早くしたい」から「したくない」の4つの選択肢から回答を得ている。結婚活動は昨年1年間に結婚相手と出会うためにやってみたことを、自由回答を含む12の選択肢⁷から複数回答で答える質問である。この回答から「特に何もしていない」を「していない」、その他活動経験がある者を「した」に区分している。回答から、「できるだけ早くしたい」と「したい」の意欲的な回答者は全体の55.9%と半数を超え、「したくない」と否定的な回答者は15.0%にとどまっている。一方、1年間に結婚活動をした活動率は全体で28.3%と結婚意欲に比べて低い。しかし、結婚意欲別にみると、「できるだけ早くしたい」と結婚に積極的な回答をした者の6割が何らかの活動をしている。しかし、「したい」では活動率が29.5%まで低下し、結婚に消極的になるにつれて活動率は低下している。このように、結婚意欲が結婚活動の動機づけであるものの、高い意欲があっても結婚活動に至っていない状況も同時に示された。

⁷ 質問と選択肢は、永久他(2015a)、東京大学(2011)と国立社会保障・人口問題研究所(2017)を参考に作成した。選択肢は「親・兄弟姉妹・その他の親族に紹介を依頼」、「友人・知人・幼なじみに紹介を依頼」、「職場の同僚・上司に紹介を依頼」、「趣味・習い事・サークル活動に参加」、「街なかや旅先で声をかける」、「合コン・街コンに参加」、「お見合いパーティーに参加」、「お見合いをした」、「インターネットの婚活サイトを利用」、「結婚相談所や結婚仲介サービスを利用」、「その他(自由回答)」、「特になにもしていない」の12種類である。

質問した活動時期はコロナ禍にあたり、結婚活動の機会が減少したり、自ら控えたりしている可能性がある。その影響を見てみると、表 3-3 のように、4 割の人は影響を感じており、出会いの機会の減少だけでなく、結婚活動が億劫になっていることが分かった。そのため、本調査の結果は、結婚意欲と結婚活動との乖離をより大きくしていることが予想される。

表 3-2 結婚意欲と結婚活動率(%)

結婚意欲	回答分布	結婚活動率
できるだけ早くしたい	20.7	58.8
したい	35.2	29.5
どちらでもよい	29.1	14.7
したくない	15.0	9.5
Total	100.0	28.3

表 3-3 新型コロナウイルス感染症の蔓延の結婚活動への影響(%：複数回答)

結婚活動への影響	回答率
新たな人と会う機会が減った	29.07
合コンなど出会いの場が減った	10.37
出会いを求めて行動をするのが億劫になった	9.15
人に紹介を頼むのが難しくなった	8.54
新たな人と会うのが怖くなった	5.28
より積極的に行動するようになった	3.86
その他	0.41
特に影響はなかった	60.16

4 結婚価値と結婚意欲

(ア) 結婚価値の推計

結婚価値は、結婚活動の動機づけとなる結婚意欲に影響を与える。本研究は、結婚価値を表 4-1 のような結婚のメリットと独身生活のメリットをプラスの結婚価値とマイナスの結婚価値⁸として、それぞれ 10 項目の計 20 項目⁹の質問の回答を用いた。各項目の選択肢は「そう思う」から「そう思わない」の 4 段階からなり、すべての項目に「そう思う」を 4、「そう思わない」を 1 のように値を置き換えた。これら項目から因子分析によって抽出された因子を結婚価値として用いる。因子分析は主成分法、プロマックス回転を行い、表 4-1 に示すような 4 つの因子を抽出した。第 1 因子は、自分の時間や金銭的な生活の充実とい

⁸ 独身生活のメリットをマイナスの結婚価値として考えることができるが、質問項目のメリットを感じていないほど、結婚価値をプラスになるという解釈することはできない。そのため、解釈を容易にするために、どちらのメリットも同じ値を割り当てた。

⁹ 質問項目は国立社会保障・人口問題研究所(2017)、永久他(2015a,2015b)を参考に作成した

った独身生活のメリットの6項目で構成されることから「自由な生活(独)」とした。この因子は独身の価値を示している(独)を付している。第2因子は精神的な安らぎや家族との生活などの7項目から構成されているので、「精神的な安定」とした。第3因子はより良い条件の人との出会いや恋愛の機会など3項目からなるので「出会いの機会(独)」とした。この因子も結婚にはない独身生活のメリットであるので(独)を付している。第4因子は親から独立し、家事や不確定要素などの不安が解消される項目で構成されることから「生活の安定」とした。これらの因子得点を結婚の価値として用いる。

表 4-1 結婚の価値に関する因子分析結果

Variable label	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	Uniqueness
	自由な生活(独)	精神的な安定	出会いの機会(独)	生活の安定	
経済的な余裕(結)	0.006	0.481	0.113	0.032	0.707
社会的信用や周囲と対等(結)	0.066	0.591	-0.002	0.092	0.582
精神的な安らぎの場が得られる(結)	0.054	0.777	0.059	-0.098	0.421
現在愛情を感じている人と暮らせる(結)	0.004	0.724	0.107	-0.073	0.470
自分の子どもや家族を持てる(結)	-0.006	0.644	-0.009	0.113	0.515
家事が楽になる(結)	-0.067	0.210	0.032	0.403	0.719
老後や病気の時に安心できる(結)	0.001	0.373	-0.093	0.450	0.566
親から独立できる(結)	-0.094	0.221	-0.109	0.499	0.678
親を安心させたり周囲の期待に応えられる(結)	0.080	0.450	-0.055	0.373	0.519
家族を持つことで自分が成長できる(結)	-0.076	0.570	-0.004	0.306	0.447
経済的に余裕が持てる(独)	0.676	0.034	-0.025	0.050	0.532
自分のやりたいことを十分にできる(独)	0.890	0.083	-0.077	-0.064	0.283
自分ペースで生活できる(独)	0.886	0.136	-0.083	-0.125	0.304
新たな恋愛をする機会がある(独)	0.034	0.062	0.799	-0.040	0.338
もっといい相手と巡り合う機会がある(独)	-0.065	0.076	0.821	-0.032	0.362
お金を自由に使える(独)	0.831	-0.060	0.014	0.014	0.296
住宅や環境を自由に選べる(独)	0.638	-0.076	0.200	0.089	0.385
家族を養う責任がなく、気楽(独)	0.648	-0.143	0.085	0.105	0.472
友人などとの広い人間関係が保てる(独)	0.129	-0.099	0.407	0.294	0.572
現在の家族とのつながりが保てる(独)	0.029	0.023	0.228	0.403	0.665

因子間相関	生活の自由(独)	精神的な安定	出会いの機会(独)	生活の安定
自由な生活(独)	1			
精神的な安定	0.081	1		
出会いの機会(独)	0.485	0.272	1	
生活の安定	0.304	0.436	0.521	1

注) 因子負荷が 0.40 以上を太字で表示している。

(イ) 結婚意欲度の推計

未婚男性の結婚意欲は、先行研究から年齢、就業形態または年収といった経済状況、結婚価値などから決まる。そこで、これら要因を説明変数にして結婚意欲度の推計を行う。推計

は、被説明変数の結婚意欲は肯定的な「できるだけ早くしたい」と「したい」の2カテゴリを1、それ以外の2カテゴリを0とした2値データに変換し、ロジット分析を行う。説明変数は、年齢、前年の総年収、4つの結婚価値、交際相手の有無、現在の幸福度と将来の希望を用いた。先行研究から、男性は年齢や年収が高いほど結婚意欲が高まると考えられ、交際相手がいることで結婚のイメージが具体化する効果から、結婚意欲を高めることが期待される。また、結婚価値は結婚と独身生活のメリットの4因子からなる。そのため、結婚意欲はプラスの結婚価値を表す因子の因子得点は高いほど結婚意欲が高くなるが、マイナス価値は高いほど結婚意欲は抑えられると考えられる。これらに加えて、現在の幸福度と将来への希望を説明変数に含めた。現在の生活に十分幸福感を得ていると、その生活を変えるような結婚を望まないかもしれない。また、将来への希望が持てない人は、将来、結婚をして家族を形成することにも消極的になることが予想される。

表 4-2 結婚意欲と説明変数の基本統計量

Variable	Mean	Std. dev.	Min	Max
結婚意欲	0.559	0.497	0	1
年齢	34.961	2.867	30	39
結婚価値				
自由な生活(独)	0.000	0.953	-2.430	1.256
精神的な安定	0.000	0.924	-2.302	2.417
出会いの機会(独)	0.000	0.902	-2.025	1.867
生活の安定	0.000	0.842	-2.943	2.170
幸福度	5.555	2.533	0	10
将来の希望				
希望ない	0.380	0.486	0	1
どちらでもない	0.307	0.462	0	1
希望ある	0.313	0.464	0	1
交際相手の有無				
いない	0.799	0.401	0	1
いる	0.201	0.401	0	1
総年収				
200万円未満	0.256	0.437	0	1
200-400万円	0.360	0.480	0	1
400-600万円	0.268	0.444	0	1
600万円以上	0.116	0.320	0	1

表 4-2 は分析に用いる変数の基本統計量を示している。幸福度の平均値は 5.56 と全体として 30 歳代男性は現在の生活に高い幸福感を持っているとも極めて悲観的であるとも言えない。そして将来への希望を持たない人が 38%と最も多くが、希望があると考えている人は 31.3%と将来の捉え方がほぼ均等に分布している。

ロジット分析の結果は表 4-3 に示している。年齢が高いほど結婚意欲は低下しており、

予想とは逆の結果となった。しかし、国立社会保障・人口問題研究所(2022)の2021年調査で、30-34歳の結婚意欲は20歳代に比べて初めて大きく低下した結果とは整合的である。年収は600万円以上の人の意欲がそれ未満の人と比べて結婚に意欲であった。男性にとって、自身の経済基盤の確保が結婚意欲醸成の条件となっていることがわかる。また、すでに交際相手がいる人の方が結婚意欲は高くなることも示された。しかし、交際状況と結婚意欲は調査時点の状態を質問しているため、因果関係が逆である可能性も否定できない。

結婚価値を見ると、結婚に精神的な安定を求める人や新しい恋愛や出会いが独身生活のメリットと感じている人ほど結婚意欲が高い。出会いの機会(独)はマイナス結婚価値と捉えていたが、結婚を意識している人ほど独身時に出会いや恋愛を積極的に行おうとするだろう。逆に出会いや恋愛に消極的な人にとって結婚は魅力に感じないと解釈できる。一方、独身の自由な生活を享受している人の結婚意欲は低く、マイナスの結婚価値であることが確認された。これは幸福度からも同じ結果を示している。つまり、現在の生活が充実し、幸福な人ほど、現在の生活を変化させる結婚を嫌う傾向にある。また、将来への不安は結婚を躊躇させ、結婚意欲を低下させている。

表 4-3 結婚意欲のロジット分析

	結婚意欲		
	Odds ratio	Z	
年齢	0.918	(-2.137)	*
自由な生活(独)	0.544	(-3.978)	***
精神的な安定	4.168	(7.541)	***
出会いの機会(独)	1.519	(2.153)	*
生活の安定	0.880	(-0.579)	
幸福度	0.888	(-2.203)	**
将来の希望 (希望がない=0)			
どちらでもない	1.782	(2.018)	*
希望ある	2.515	(2.851)	***
交際 (交際相手はいない=0)			
交際相手がいる	2.208	(2.410)	**
年収(200万円未満=0)			
200-400万円	1.763	(1.910)	
400-600万円	1.213	(0.597)	
600万円以上	2.600	(2.218)	**
Intercept	18.957	(2.040)	*
N	492		
Log likelihood	-240.40		
χ^2	194.40		
Model DF	12		
Pseudo R-squared	.288		

*** p<.01, ** p<.03, * p<.05

この分析結果から結婚意欲の程度(以降、結婚意欲度)を求める。これは結婚意欲の予測確

率を 100 倍したものである。表 4-4 は結婚意欲別の結婚意欲度の平均値を示している。結婚意欲の強い「できるだけ早くしたい」のグループの結婚意欲度の平均値は 77.47 と意欲どもの高いのに対し、「したくない」は 27.83 と約 50 ポイントの差があり、結婚に意欲的であるほど結婚意欲度も高いことが示され、これを以降の結婚活動の分析に用いる。

表 4-4 結婚意欲回答別結婚意欲度

結婚意欲 (回答)	結婚意欲度	
	Mean	Std. dev.
したくない	27.83	26.07
どちらでもよい	41.24	25.80
したい	67.30	21.57
できるだけ早くしたい	77.47	19.13
Total	55.89	29.25

5 リスク選好と時間選好

(ア) 絶対的危険回避度

危険回避度の測定は、「スピードくじ」の値付けの質問を用い、回答者のリスクに対する選好から絶対的危険回避度を算出した。「30%の確率で 10 万円が当たる「スピードくじ」が 1 本だけあります。当たれば賞金は今日すぐに支払われますが、外れた場合の賞金はゼロです。このスピードくじを買おうと思っている人は他にもいます。「スピードくじ」が次のような価格であった時、あなたは買いますか」という質問に対して、提示金額は 10 円、100 円、1,000 円、3,000 円、5,000 円、10,000 円、15,000 円、20,000 円と 30,000 万円の 9 つである。回答はそれぞれの提示金額で「買う」か「買わない」を選択する方式で、「買う」から「買わない」に移動した金額の間に回答者の支払ってよいと考える最高金額があることになる。この「スピードくじ」の報酬の期待値は 3 万円なので、最高支払金額が期待値と同額の場合「危険中立的」であり、3 万円未満の場合は「危険回避的」、3 万円以上の場合「危険愛好的」となる。今回提示した最高金額は 3 万円であるため、3 万円まで「買う」を選択し続けた人は「危険中立的」または「危険愛好的」であり、それ以外の方は「危険回避的」と判断できる。

絶対的危険回避度(RA)は、Cramer et al.(2002)に従って次式から算出できる。「スピードくじ」の賞金を $A=100,000$ 、当選確率を $p=0.3$ 、回答者がつけた最高価格を b と置くと、

$$RA = \frac{pA - b}{\frac{1}{2}(pA^2 - 2pAb + b^2)}$$

危険回避的な人の RA はプラス値となり、危険中立的な人はゼロ、危険愛好的な人はマイナス値になる。真の最高支払額は「買う」から「買わない」に切り替わった金額の RA の中央値を用いた。ただし、3 万円以上の場合には上限値を 5 万円にして算出している。RA は表 5-1 に示すように、支払金額の設定から -0.8 から 2 の値をとる。

危険回避度別の回答者の分布をみると、危険中立的または愛好的な人は全体の 4.7%で、ほとんどがリスクに対して回避的な選好を持つ。特に期待値の 1/10 未満の 3 千円未満が全体の 6 割に上り、多くの人リスクに対し回避的な態度をとることが予想される。

表 5-1 スピードくじの支払い金額(絶対的危険回避度)の回答分布

最高支払金額区間	RA	回答分布	最高支払金額区間	RA	回答分布
0-10 円	2.000	15.45	5-10 千円	1.718	10.77
10-100 円	1.999	5.28	1-1.5 万円	1.445	6.71
100-1,000 円	1.984	22.76	1.5-2 万円	1.100	1.42
1-3 千円	1.941	17.07	2-3 万円	0.455	2.85
3-5 千円	1.872	13.01	3 万円以上	-0.800	4.67

(イ) 時間選好と先送り行動

割引関数が双曲型であるとき先送り行動を誘発するが、自身の特性を自覚して計画通りに行動できる人もいる。時間に対する選好は子供の時の夏休みの宿題の実行と計画に関する質問から分類した 4 つの類型を用いる¹⁰。宿題の実行に関する質問は「あなたはこどもの時、夏休みに出された宿題をいつごろやるが多かったですか」で、計画は「あなたはこどもの時、夏休みに出された宿題をいつごろやるつもりでしたか」である。共通する選択肢は「最初の頃にやった(やるつもりだった)」、「どちらかという最初の頃にやった(やるつもりだった)」、「毎日ほぼ均等にやった(やるつもりだった)」、「どちらかという終わりの頃にやった(やるつもりだった)」と「終わりの頃にやった(やるつもりだった)」の 5 カテゴリーで、計画の質問のみに「とくに計画を立てなかった」を追加している。

分類は次の手順で行った。まず、実行と計画の回答が一致している人は、計画通りに宿題を実行しているの、時間整合的な選好を持つまたは現在重視の選好を自覚して自制できるソフィスティケートな人(以降、時間整合型)である。次に、計画より遅れて実行した人を現在重視で自覚のないナイーブな人(以降、現在重視型)、計画より前倒しで実行している人を将来重視でナイーブな人(以降、将来重視型)に分類する。そして、計画をとくに立てなかった人は実行した時期にかかわらず無計画型とした。無計画型は全体の 28.1%おり、その 84.1%が宿題を夏休みの後半に実行していたことから、無計画型は現在重視型であると考えることができるが、ここでは現在重視型と区分して進めていく。これら 4 つの選好の特性から、結婚活動の先送りを行う傾向にあるのは、現在重視型と無計画型であることが予想される。表 5-2 の通り、時間整合型が 4 割と最も多いが、半数以上が現在重視型と無計画型の 2 類型に分類されている。宿題を夏休みの終わり頃に行っていた割合(後半時期実行率)を見ると、現在重視型と無計画型のほとんどの人が先送り行動をしている。

¹⁰ 質問と選択肢は大阪大学(2008)や盛本(2018)を参考に作成した。

表 5-2 時間選好類型の分布と(%)

時間選好	類型 分布	宿題の計画と実行から見る類型の特徴	後半時期 実行率
時間整合型	40.04	計画と実行が一致。指数型または双曲型を自覚し自制するソフィステイケート	27.92
将来重視型	5.89	計画より前倒しで実行。	5.89
現在重視型	26.02	計画より遅れて実行。双曲型を自覚しているが自制できないタイプ	86.72
無計画型	28.05	計画を立てない。双曲型を自覚していないタイプ。	84.06
Total	100		58.13

6 結婚活動

結婚活動は結婚を目標にした活動なので、結婚意欲によって決定される。しかし、先述の通り、結婚意欲があるにもかかわらず、活動をしていない人は多い。危険回避の態度は、結婚や結婚のタイミングを早めると考えられるが、逆に遅らせるという考えもある。また、独身のままでいるよりも将来結婚した方がよいことはわかっているが、そのために結婚活動に時間やお金をかけることを選ばない人もいる。現在重視型や無計画型のような特性を持つ人は、将来の結婚よりも現在を重視するので、結婚活動を先送りする傾向があると予想される。そこで、結婚活動を被説明変数にし、結婚意欲、危険回避度、時間選好を説明変数にしたロジット分析から結婚活動をしらない人の特徴を見てみることにした。

表 6-1 は、結婚意欲の回答を用いた model1 と結婚意欲度を用いた model2 の結果を示している。まず、結婚意欲が強いほど結婚活動を行う確率が高くなり、結婚活動を促進するためには、まず結婚意欲の醸成が必要であることがわかる。加えて、個人のリスク選好や時間選好の特性が、結婚活動に影響を与えていることが示された。結婚活動に対して危険回避的な人ほど積極的に行わないという結果が示された。つまり、結婚することで回避できるリスクよりも、結婚活動で起きるリスクを回避するために結婚活動を選択しない傾向にあることがわかった。

また、無計画型の人は時間整合型の人に比べて結婚行動の先送りをしていることがわかった。現在重視型は時間整合型との差が認められず、同じ先送り傾向にあると予想していた無計画型とは異なる選択をしている。この結果は次のように解釈できる。それは子供の時の行動を用いたことである。現在重視型は子供の時から計画を立てており、その計画と実行のズレを経験していく中で、自制した行動ができるようになった、つまり、現在ではソフィステイケートな人になったと考えることができる。しかし、無計画型は、計画を立てないことで先送りをしていることを認知することができない。そのため、自制心を養う機会を失い、現在も先送り行動を起こしやすいと考えられる。一方、将来重視型と時間整合型は長期的な視野を持って計画的に行動できるので、結婚活動の実行に差はないと予想したが、分析結果から将来重視型の方がより積極的に活動することが明らかになった。これは、将来重視型は計画より前倒しで実行するタイプなので、同じ程度の結婚意欲の場合、前倒しで結婚活動を

始めていることが考えられる。以上のように、結婚意欲のある未婚男性がなかなか結婚活動に踏み出さないのは、リスクや時間に対する選好という個人属性が寄与していることが示された。

表 6-1 結婚活動のロジット分析

	model1		model2	
	odds ratio	Z 値	odds ratio	Z 値
結婚意欲(回答)(したくない=0)				
どちらでもよい	1.511	(0.871)		
したい	3.742	(2.979) ***		
できるだけ早くしたい	12.670	(5.568) ***		
結婚意欲度			1.033	(7.005) ***
危険回避度	0.657	(-2.564) **	0.694	(-2.205) **
先送り(時間整合型=0)				
将来重視型	3.692	(2.904) ***	3.317	(2.671) ***
現在重視型	0.736	(-1.110)	0.651	(-1.577)
無計画型	0.521	(-2.221) **	0.499	(-2.396) **
_cons	0.262	(-2.742) ***	0.119	(-4.887) ***
N	492.		492.	
Log likelihood	-244.902		-246.732	
X ²	95.990		92.329	
Model DF	7		5	
Pseudo R-squared	0.164		0.158	

*** p<.01, ** p<.03, * p<.05

7 まとめ

本稿は、結婚意欲がある未婚男性が結婚活動を行わない理由をリスク選好と時間選好という個人の特性によって説明することを目的としている。2021年に実施したweb調査の結果、次のような結果を得ることができた。まず、結婚意欲が高いほど結婚活動率は高くなるが、「できるだけ早くしたい」と高い結婚意欲があっても、4割の人が結婚活動を行っていないこと分かった。先行研究から危険回避的な人や時間割引率が高い人の結婚タイミングは早くなると考えられている。しかし、結婚活動はマッチングまでコストがかかり、そして結婚活動にもリスクが存在する。その場合、将来のリスクよりも現在の結婚活動に含まれるリスクを回避したり、将来の利益より現在かかるコストを重視したりすることで、結婚活動をしなない選択をしてしまう。分析の結果、危険回避的な人や計画を立てないことで先送り行動をしがちな人は、結婚行動をしなない傾向にあることが分かった。この行動は、目先のリスクを過大評価することや、将来の結婚のメリットを過少評価することで起きる。そのため、自身の特性をよく理解して、行動をすること重要である。

【参考文献】

- 岩間暁子, 1999, 「晩婚化と未婚者のライフスタイル」, 『人口学研究』, 55(2), pp.39-58.
- 大阪大学, 2008, 「くらしの好みと満足度についてのアンケート」.
- 釜野さおり, 2004, 「独身男女が描く結婚像」, 目黒依子・西岡八郎編, 『少子化のジェンダー分析』, 勁草書房, 第5章.
- 厚生労働省, 2023, 『令和3年(2021)人口動態統計(報告書)』.
- 国税庁, 2022, 『令和3年分民間給与実態統計調査—調査結果報告—』.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2022, 『第16回出生動向基本調査 結果の概要』
- 小林淑恵, 2006, 「結婚・就業に関する意識と家族形成」, 『人口学研究』, 39, pp.1-18.
- 総務省統計局, 2020, 『令和2年国勢調査』.
- 佐々木周作・大竹文雄, 2019, 「医療現場の行動経済学—意思決定のバイアスとナッジ」, 依田高典・岡田克彦編『行動経済学の現在と未来』, 第2章.
- 佐々木周作・平井啓・大竹文雄, 2016, 「リスク選好が乳がん検診の受診行動に及ぼす影響: プログレス・レポート」, 『行動経済学』, 9, pp.132-135.
- 佐藤一磨, 2016, 「危険回避的な人ほど早く結婚するのか、それとも遅く結婚するのか」, 『経済分析』, 190, pp.25-46.
- 橘木俊詔・木村匡子, 2008, 『家族の経済学: お金(かね)と絆のせめぎあい』, NTT出版.
- 東京大学, 2011, 「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」.
- 中谷奈津子, 2018, 「未婚男女における結婚意欲の関連要因」, 『日本家政学会誌』, 69-2, pp.105-114.
- 永久ひさ子・寺島拓幸, 2015a, 「未婚男女における結婚価値と結婚活動」, 『文京学院大学人間学部研究紀要』, 16, pp.63-72.
- 永久ひさ子・寺島拓幸・文野洋, 2015b, 「未婚男女における結婚価値と結婚意欲」, 『文京学院大学総合研究所紀要』, 15, pp.119-130.
- 西村智, 2016, 「若者の恋愛離れに関する一考察: 恋人探しにみる先送り行動」, 『人口学研究』, 第52号, pp.25-27.
- 西村教子, 2020, 「危険回避と時間選好が男性の晩婚化・未婚化にもたらす影響」, RISS Discussion Paper Series, 82.
- 福田和也, 2005, 「未婚者の居住形態と家族形成意欲」, 『経済学研究論集』, 23, pp.11-31.
- 村上あかね, 2010, 「若者の交際と結婚活動の実態: 全国調査からの分析」, 山田昌弘編, 『「婚活」現象の社会学: 日本の配偶者選択のいま』, 東洋経済新報社, 第2章.
- 盛本晶子, 2018, 「時間選好率および現在バイアス性がオンラインゲーム内コンテンツへの課金行動に与える影響」, 『行動経済学』, 11, pp.1-13.
- 山田昌弘, 2010, 「婚活」現象の裏側」, 山田昌弘編, 『「婚活」現象の社会学: 日本の配偶者選択のいま』, 東洋経済新報社, 第1章.
- Cramer, J. S., J. Hatog, N. Jonker and C. M van Praag, 2002, “Low Risk Aversion

Encourages the Choice for Entrepreneurship: An Empirical Test of a Truism”
Journal of Economic Behavior and Organization , 48 (1), pp.29–36.

Ermisch, John, 2003, *An Economic Analysis of the Family*, Princeton University Press.

Spivey, Christy, 2010, “Desperation or desire? The role of risk aversion in marriage”,
Economic Inquiry, 48-2, pp.499-519.

Keeley, M.C., 1977 “The economics of Family Formation”, *Economic Inquiry*, 15(2), pp.238-250.

Picone, G., F. Sloan, D. Tylor, 2004, “Effects of Risk and Time Preference and Expected Longevity on Demand for Medical Tests”, *The Journal of Risk and Uncertainty*, 28(1), pp.39-53.